

# 夏の居候と剣と鬼

へんぜる

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

少年が夏に出会った少女と、少年の周りで巻き起こる事件、そしてその犯人とは……。

# 目次

第一話 夏休み | 1

第二話 一つ屋根の下 | 8



# 第一話 夏休み

鳴り止まない蝉の鳴き声と照りつく日の光の中

—俺は少女に恋をした—

ミーン、ミーンと蝉の鳴き声が聴こえる。

学校が夏の長期休暇に入って、一週間が過ぎた。

時間が過ぎるのは早いもので、夏休みが始まってもう一週間が過ぎてしまった……。

バイトもしていないので、24時間を自由に使えると言うのにまだ何もしていない。と言うか家からも出ていない。

それなら毎日何をして過ごしているのかと言うと…… テレビゲームやネットサーフィンをだらだらとやり続ける日々。

此処で1つ言っておくが俺は引きこもり、またニートやその他の類いではない。

時計を見ると12時を指している。

「そろそろ起きるか……」 そう言って重たい身体を起こす。

母親はキャリアアウーマンと言うやつで、母は何時も仕事で外国を飛び回っている。

(仕事の内容は知らないが)

よって何時も家には俺自分独りだけだ。もう独りの生活にも慣れ、家事も手慣れたものだ。

父の方は自分が小さい時に突如現れた闇の穴に吸い込まれて行った……と、母に聞かされた。……出来ればもつとましな嘘をつけてほしかった。

まあ片親と言うヤツだが気にしてはいない。

顔を洗い今日は何をしようか？

と、考えているとカレンダーが眼に入る。そして、今日の日付に赤い丸で目印が付けてあることに気付いた……。

ん？今日なんかあったっけ？新作のエロゲの発売日か？

とか考えていると今日がなんの日かを思いだし背筋が凍る……。

「ヤバい……今日は母さんが帰って来る日じゃん……」

年に数回ほど息子の様子を見ようと、日本に帰国して来るのだ。

リビングを見渡すと、とても綺麗と言える状況では無い。

と言うよりはゴミ屋敷と言う表現が合っている様な気がする……。

ゴミはゴミ袋に適当に詰め込み、空いている部屋に突っ込む。

食器類はとりあえずキッチンのシンクの中に放り込む。

そんなこんなで一応見た目は良くなったが、母を裏方に回すことは出来ないだろう。……それすなわち死を意味するからだ。

時計を見ると2時30分だ。

母が帰って来るのは何時も5時前後なので、まだ2時間は時間がある。

何をしようかと考えていると、何となく外を歩いてみたくなった。

履き潰したお気に入りのスニーカー（オールスターの黒のハイカットで紐を通す穴にはスタツズが付いている）を履き、玄関を開ける。そうすると、さつそく太陽の陽射しの洗礼を浴びせられたのだった。

「あちいゝ死ぬわ〜」

そう呟いてみても暑さは変わるわけでは無いのだが、何故か条件反射的に口から出してしまう。

外に出るのは一週間ぶりだし……正直りハビリ無しにこの暑さはキツイ。クーラーの効いた快適な環境でゲームやネットをしていたのがとても懐かしく感じる……少し前の事だが。

暫くの間 道なりに歩いていると、長い階段が見えてくる。階段の上には神社があり、もう少し日が経つところら辺で一番大きな祭りが開かれる筈だ。

出店は勿論、人も集まるし花火も上がる。

他県からわざわざ見物に来る人もいるくらいだ。

まあ俺の目当ては巫女さんだけだな。

さらに進んでいくと通っている高校が見えてくる筈だが、そこまでは歩きたくない。そろそろ私のHPが0になるからだ。近くのコンビニに寄りつつアイスでも買って、HPを回復してから帰るとしよう。

コンビニに入るとそこは天国だった。

「なんて涼しいんだ！」

アイスはガリガリ君を買った。そして、外にでてはまた陽射しが攻撃してくる。

だが俺にはガリガリ君がいる！ さっきまでの俺と思うなよ！

と、心の中で叫んで袋を開けた。

するとガリガリ君ソーダ味は地面に突き刺さった。

「……」

かつて無い虚しさが俺を襲った。

「帰ろう……」

肩を落として来た道を帰った。

やっと家につくと車があったので、すぐに母が帰って来たのだとわかった。



「ただいま……」

と玄関の扉を開けると見慣れないモノが立っていた。

「お邪魔しました！」

誰だ今の?! 家を間違えたのか?

標識を覗くと鶴木と書いてある珍しい姓なので見間違える筈が無かった。

やっぱり……自分の家だよな……なら今の誰だ??

ドアを少し開けて中を覗くこちらを見ていた。

目が合い、ドアを閉めた。

するとドアが開き、中から顔が出てきた母だ。

「ヨッ！」

「よう……久しぶりだなわが母よ……」

「おう! 久しぶりだなわが息子よ……」

「して中の人物は……いったい?」

「ああ、あれは貴様へのプレゼントだ……嘘だ。可愛かったから空港で拾って車にのせ

て帰ってきた!」

「それ誘拐じゃねえーかー!!」

「大丈夫! ちゃんと同意のうえで誘拐してきたから!」

「誘拐って言うてるし！」

「だって迷子みたいだったし……可愛かったし……」

「なら迷子センサーにつれてけよ！早く返してきなさい！」

「ええー、ケチ！」

「……」

「ぐっ……ハイ……返してきます……」

うくんなんか身体がやけに重いな……

昨日歩いたから筋肉痛にでもなったかな？

「グッ」

腹部に痛みが走る。目を開け、腹部を確認しようと思った……。

何かが乗っている。

窓からさす日の光で彼女の金色の髪はキラキラと輝き、絹のようになややかにさらりとこぼれた肌は透き通るような白色で、雪を連想させる。蒼く光る目はまるでサファイ

アのように、その瞳はじつとこちらを見据えていた。

奇妙な女の子との共同生活が始まった。

そして、鳴り止まない蝉の鳴き声と照りつく日の中、

—俺は少女に恋をした—

## 第二話 一つ屋根の下

「なあ……なんで俺の上に乗って……」

そこまで言っただけで気がついた。

彼女が俗に言う裸ワイシャツの姿だと言うことに……。

あのあと、うちの母が空港まで連れて行ったのだ。しかし、相手の保護者にホームステイの形で留学させたいと言われ、その場で即OKしたらしく戻って来てしまったのだ。

詳しい事は教えて貰えなかったが。

---

「ちよっなんてそんな格好なんだよ！」

そう言っただけで目をそらす。

「これしか無かったの」

「そうかそれなら仕方ないな！ ……ってなるか！」

「……だって自分で服を着たことが無いもの。……だから貴方が私に服を着させるしか無いわ」

昨日の夜にほつたらかしにしたのがいけなかったか……。

ん？ ちょっと待てよ？ 自分で服を着たことが無い？

「今、自分で服を着たことが無いって言った？」

「言ったわ」

「MAJIKKA！」

「マジよ」

いったい何なんだ。コイツこの行動にこの言動、まったく訳がわからん。

でも下着は流石に履いてるよな？

「あの一いつ質問させていただけでも宜しいですか？」

「ダメよ」

!?

「なんでだよ！」

「嘘よ。あまり叫ばないで、耳が痛いわ」

「貴様あ、覚えてろよ」

「忘れるわ」

「わーお！ 話が進まなーい！」

「……で？ 質問は何？」

「あ、うん。えゝ下着は着けています？」

「えっち」

!?

「えっ？」

「えっち」

「ストツプ！」

「貴方って耳が遠いのね」

完全に向こうのペースに飲まれている。

だが此方も黙ってやられているだけではないのだ。

「○○○して○○○してやるぞ！」

フツ……勝った。

お前の敗因は男子高校生を甘く見た事だな。

「……………どういう意味？」

き……………効いていないだと。

意味を知らなかったら確かに意味はないが。

「言ったこつちが恥ずかしいわ！」

「もしかして、いやらしい事なの？」

「うっ……………」

「えっち」

もういいわかったやめてくれ！　俺が悪かったからああッ！。

穴があつたら入りたい……………。

「履いて無いわ」

「MAJIKKA？」

「マジよ」

鎮まれ俺の中の獣よ……………耐えるんだ……………駄目だ出てくるなよ。

「ノーパン、ノーブラよ」

くっ……………想像するな俺。

落ち着け、こう言うときは素数を数えるんだ……………。

「ねえ……お腹がすいたわ」

「そうだな……なら何か作ってやるから、いい加減俺の上から降りてくれないか？ え  
くと……」

「エレンで良いわ。あなたは？」

そう言えば自己紹介がまだだったな。

「俺は鶴木操だ。よろしく」

「……よろしく」

そう言っただけで彼女は俺の部屋から出ていった。

二度寝をしようと思ったが、また上に乗られては困るので渋々ベッドから出て起きる  
事にした。

とりあえず洗面所で顔を洗い歯を磨く。

そうすると、後ろから服を引っ張られた。

「んっ？」

振り向くとエレンが包丁を此方に向けて立っている。

「ちよっどうした？ 危ないから！」

廻れ右するエレン。

と同時に、エレンの持っている包丁が俺を襲う。



「うおっ！ お前は俺に怨みでもあるのか！ と言うかその前にその格好をどうにかしてくれ！ 昨日、お前が着てた服で良いから着てきてくれ！」

「……わかったわ」

そう言つてエレンは二階にあがつていった。

歯ブラシを口からだし、とりあえず口を濯ぐ。

エレンが着替えている間に朝ごはんを作つてしまおう。

そのままリビングに行きキッチンに入ると……、

「な、何があつた？」

戦争でもやったのかつて思うほど散らかつていた。

とりあえず今の惨状を見る限り、冷蔵庫の中身は空だろう。

食器も割れている、サラダ油も床に広がっている、何をどうしたらこうなるんだ？

と言うか人の家なんだが。

もつと気を使つて欲しいものだ。

「お腹がすいて死にそうなの。だから自分で作ろうと思つたの」

突然後ろから声をかけられた。

振り返りると真っ白なワンピース、腰に大きなリボン、胸の中央にも小さなリボンが付いているイーを来たエレンが立っていた。

「お前服一人で着れるじゃ……」

美しいとはこのような人物に向けて言うのだろう。真っ白なワンピースを着た金色の髪と蒼色の瞳の少女は、俺をこの上なく魅了した。

俺は真っ白なワンピースを来たエレンから、暫くの間目が離せなかった。  
「始めて自分で服を着たけど案外簡単ね」

「……」

「どうしたの？」

「あ、いや」

「えーと、料理の経験は？」

「この道具で作るのよね？」

そう言っつて右手に持つ包丁を前に突きだす。

「うおっ！ だから俺に何か恨みでもあるのか!？」

と言うか包丁を持って移動していたのか。

「別に無いわ」

「料理の仕方くらい私でも知っているわ」

「他には火を使うんでしょ？」

それは知つていゝと言わない。

「はあく……俺が朝ごはん作るから、リビングのソファに座つてテレビでも見てろ。頼むからおとなしくしててくれ」

「……」

黙つてリビングに行きソファに座るエレン。

「ふう……疲れる……」

えくと生き残つてゐる食材は……。

卵は割れずにももたものが幾つかと、真空にされて5枚に切り分けられているハムが足元に転がっていた。

まあこの二つの材料があれば何とかなるだろう。

スクランブルエッグとハムの上に卵を落とした目玉焼きを作ることにした。

エレンは窓から指す光に照らされ、ソファにきちんと座り込んで朝ごはんができるのを待つてゐる。

それはまるで絵画の様だった。

エレンの髪は日光に当たり、キラキラと輝く目はガラス玉のように透き通つてゐる。

俺はその空間だけ……時間が止まっているかのように思えた。